The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	春季探勝會の記
Author(s)	酒井, 不如; 中納, 愛子; 藤塚, 紅果
Citation	懐徳. 1930, 8, p. 76-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88816
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

春季探勝會の記

酒井不如

◇大阪より三條まで

一切の物が歡喜と生命とに輝いて居る五月四日の初の日曜、吾等一行を乘せた京阪電車は、ひた向きに京へ京へと走つて居る、行樂日和で車中は滿員、窮屈な思ひをしながらも、自分自分の趣味を語り思想を談じて居るものもあれば、又窓の外の風物の移り行く樣を賞して居るものもあつたが、可成に長き時間のことゝて、果ては疲れて、無我の境に入つた人もあつた、折柄晩春の野邊には麥穗漸く出揃つて雲雀は高く春の歌を奏でて居る、菜の花は、すでに凋落して僅かに點々と名殘の色をとめて居るのみである、なごやかな風に吹かれて戯れ遊ぶ村童も、一竿を肩に畦畔を行く漁翁も、皆それ〴〵に春閑さに醉ふ樣は畫中の人たるを失なはない。常には澱の川を隔てゝ近く呼べば應へん天王山の戰場も、稍々曇り勝ちなれば山の姿のみ薄くくま取るのみ、やがて數々の驛路を經行けば、四方の風物何となう改まりて、京の山々は霞の中に綠りして見ゆ、加茂の水に車の軋る音を流しつゝ、高山彦九郎の王城を拜する京の三條橋畔に着く、時に十一時、　行は吉田先生を初め、小沼、白井、中川、中田、中納、小松、寺部、藤塚、酒井の會員と伊吹氏母子、里田氏兄妹藤原、松原の閨秀歌人、鶴田氏との十七人であつた。

◇三條より南鄕まで

中納愛子

京の三條は疏水の流れに影見せて、新葉清々しい柳が戰いてゐる。最近に大橋々畔へ建てられた高山彦

九郎の銅像が、今は甍の波の中に見るべくもない御所を、嚴に拜してゐる。橋には昔ながらの擬寶珠が附いてゐるが、いかにも古都らしい味ひがある。もつともこゝを往來の人々が京ブラ四條ブラへ急ぐ近代人とは、彦九郎ならずとも轉た今昔の感があらう。

京阪の支線、元の京津電車へ乘換へて濱大津まで出る。車窓からのぞけば都ホテルの躑躅が今を眞盛りに紅の花を連ねて實に美事だ。

山を背に紅殼塗りの京の家居も鄙びて、大津街道は新綠の裝ひ美しい。籬にこぼれる茨の白、木の下隱れに、名も知らぬ草等目を樂しませてゐるうち、大津着。きづかはしいお天氣ながら乘舟場には團體客の乘込みが相當にあり、待たされること暫らく、樂浪や、志賀の大海は空も水も一つに寂しい灰色をして、靜かに靜かに岸邊にたゆたうてゐる。自ら人麿の歌でも口刻みたくなる。萬葉人が目の前に彷彿する樣な水の色である。

折柄所定の舟が來る。思ひ思ひの席もきまると、いつしらず舟は動いてゐる。鴉の海の靜寂を、灰色のたゞ中を、漸次に進む。省みれば比叡の嶺は、大觀ゑがく淡ずみの山脈の中にも仄かに濃くて、それを領かれる。突堤に魚つる人。學生の練習するらしいボート、オールを並べて吾が舟に對抗するのも面白い。

からりと晴れた日もさる事ながら、かうして遠望のきかない模糊とした有樣もまた捨てがたい。一時間餘の餘裕があるので、少々早いけれど船中でお晝をいたゞく事にする。ゆつくりしてゐて樂しいものだ。

右岸に膳所の城趾が見ゐる。刑務所、レイヨン會社等大きい建物がつゞく、金波樓の庭先を指し「あれはわしの別莊」と洒落れたのは誰やら。粟津の古戰場も面影に見、瀨田の唐橋をくゞる。セメントのお化粧が成つて、裏から見たところ、すこぶる現代的だ。スクリウの音たかくては、百足蟲ものろのろ出てくるわけにはゆかない。

太公望が大勢ゐる。何がつれるだらう。宿の揃ひの褞袍を來た人が二三人同じ様に垂れてゐる。

近時瀬田の蜆は汽船の落す油で臭氣がひどいとか水の上に滯うて紫色に光るのは油らしい。

東海道線の瀬田鐵橋をゆく上り貨物車一聯、その車に目をつけてゐるとみじんも動いてゐる様に見ねないのは興だ。こちらが動いてゐるせいででもあらう。汽車を見るのは子供らしいが面白いものだ。

石山で大半の人が下りる。初夏の候、螢が飛びかふ夜は、いかにも涼しさうである。

川巾はまつたく狹まり、兩岸のさみどりの影を落しておだやかな水の色がますます深くなる。

湖尻に近き南郷はすぐだ。下船のま際まで五目ならべなどする人等。どちらが勝つたやら負けたやらこれからまた暫く陸路だ。

○南郷より外畑に向ふ途上にて

深山かげそこらく匂に藤浪の
紫の花の垂りのよろしさ

手折もて土産(ツト)にせまくな藤浪の
匂ひゆかしく咲き盛りたり

瀨をなして岩間がくりにゆく水の
やゝに淀みてダム近からし

○宇治川ラインにて

水尾ひきてゆく吾が舟のあふり波
よするたまゆら水漬く山藤

川波のまにまさゆらぎはしきやし
水漬きて匂ふ山藤の花

あしびきの山の峽間のさみどりの
映ゐて著(シル)けみ匂ふ山藤

あしびきの山影うつしいよしにも
深き青淵水泡動けり

水の面に枝垂る鈴懸めぐしかも
ををりにをゝる花の眞白さ

○白雲亭にて

藤浪の花の下びに立ちてゐつ
ほのかなるかも夕月のぼる

藤浪の花諸垂りに垂花の
　ゆたにたゆたふ色のめでたさ

◇南郷より黃檗まで

藤塚紅果

正午を過ぐる二十分南郷に着く。此處で外畑（宇治川ライン乘船場）まで自動車組と徒歩組の二派に分れる。徒歩組は小松熊之助翁、酒井幹事、藤塚幹事補佐、素讀生伊吹千惠子の四名で、何れも健脚を以て自任する者。最初徒歩組であつたのが、外畑まで二里もあると聞かされておつたまげ、自動車組に早變りしたのに中川幸三君がある。これは内密々々。

やがて自動車は一抹の白煙を殘して外畑に向つた徒歩組は外畑まで二時間の豫定で歩調を執る。路は平々坦々、春風徐に顏を撫でゝ頗る氣持が好い。これなら殘る煙も癪の種にならない。南郷の洗堰を見無駄口を交はしながら瀨田川に沿うて下ること十五丁、厄除に靈顯いやすこと聞く立木觀音登り口に到る。道しるべに登り八丁とある。何の八丁位と登り出したが、可なり嶮峻である。が新綠と靜寂とは、平常黃塵萬丈と噪音の中に住んで居る吾等の身心をすつかり洗つてくれる「藤塚さん、僕はね、俳句の宗匠にならうと思つて、此間から大分ひねくつてゐるんですがね、今一句浮びました」

鐘の音の靑葉の山に消ゐにけり　不如

酒井幹事の鼻息當るべからず。「こりやうまいですな、秀逸々々」

時々藪鶯が鳴く。

口笛に鶯誘ふ若葉かな　紅果

「これはあきませんか」「いや秀逸々々」

きけきけと鶯の鳴く立木山　不如

「うまいでせう、即興詩人ですな」樂屋からほめる「秀逸々々」なんでも秀逸だからわけはない。

五丁程登ると大分汗が出て來た。小松翁はまだ二丁も下で汗を拭き拭き一息入れてゐる。

絕頂の觀音堂に參詣、厄除と開運の祈願をこめて傍らの茶店の澁茶で息をつぐ。

元氣回復した小松翁を促して近道裏山を下る。小松翁老鶯の……老鶯の……と小首をかたげながら句作に餘念がない。「小松さん、一つ白樂天式にいきさうなものですな」今度は不如氏漢詩口調にいかうといふ。「出來ませう、まあ鶯は老鶯とやりますか」「この山は靜かだから山寂としますな、老鶯の山寂として……老鶯の山寂として……あとが出ませんか」

新綠や老鶯の鳴く山寂として　紅果

「これなら百パーセントの白樂天式でせう」「なるほど、併しどうも……」と未來の宗匠は感心したやうなせんやうな顏付。

山藤山躑躅が今を盛りと咲いてゐる。

山下りて目に新なり藤つゝじ　紅果

立木道見る人もなき藤の花　不如

やがて山を下り、風光いふに足らない宇治川に沿ひ更に五十丁下つて、三時外畑に着く。モーターボートに乘遲れた先着の自動車組の小沼老と懷德堂の小母さんとが吾々を待つてゐてくれられた。「とてもにらい人でなか〳〵乘れない」と小沼老がこぼされる。乘船場は後から後からと來る人で一杯だ。

四時頃押し合ひへし合ひでやつとモーターボートに乘る。さあこれからが京阪電車が宣傳これ努めてゐる天下の絕勝所謂宇治川ラインだが、宇治川電氣會社が堰堤を造つたからでもあらうが、水流至つて緩漫、まるで池のやう。又不幸にして私の眼には只沿岸の新綠が映つたのみで、これはと感歎するやうな絕佳な風景に出くはさなかつた。三十分で下船場堰堤に着く。堰堤より數丁の天ヶ瀨から宇治まで四十丁を自動車でブッ飛ばし、電車に乘換へ黃檗に下車。萬福寺で自動車組と落合ひ、寶物拜觀後晩餐會場である門前の普茶料理白雲庵に入る。席上中川君の友人里田君の賢妹民子さん、遙か末席にゐるので「奧さん、どうぞあちらへ、どうぞ、どうぞ」と酒井幹事お役目柄上座に据ゑやうとする。里田君にやり〳〵笑ひながら「奧さんや言ふとうる」「奧さんと違ひまつせ、妹さんだつせ」中川君が叫ぶと、酒井幹

事ぬからず「僕も妹さんだとは思つてたんですがね」といふやうな喜劇もあつて、賑々しく箸を執り、八時解散。

黄檗や茶摘歌聞く普茶料理　紅果

野を越にて茶摘の歌の聞にけり　不如

◇黄檗山の聯を見て

酒井不如

萬福寺の史實を論ずるのでないから詳細に書くことを省畧する。が然し萬福寺は清の隱元禪師が渡來して來て、こゝ木幡の地に靈場を開き黄檗の宗派を日本内地に布敎したことは周知のことである、しかしこの黄檗の地名はこれより始まつたものと思はれる、がこの隱元が黄檗の地に靈場を開き開山となつてから現在に至るまで四十七代の住職をかへ。その間約二百七十年程を經過して居る、その中で支那僧で住職となつたのは十七人である。尤も十五代と十八代は大鵬といふ支那僧が再住したので正確に言へば十六人である。殘りは皆日本僧であつた。隱元が開山した時は丁度後西天皇寛文元年で、支那では順治十八年に相當する。そして皇室や德川幕府の尊信は可成に深かつた。

當山の堂宇の建築樣式は明風建築である。用材は大部分チーク材を使用して居る、このチーク材を用いたことについては、可成な挿話もある樣であるが省略するが、この明風建築の細部を記して見れば、ざつと次の通りである、

1 總門　唐門造り（龍宮造り）

2 前面一間の吹き放ちの拜所も明風である

これに柱をたて高欄には万字組子を使用し虹梁持送りには特種の復維なる彫刻を加ふ。

3 圓窓—雲肘木—太皷明礎盤—三味線胴礎盤—扁額—聯

4 軒先か急に跳ね上る萬福寺のものは少し

5 寶珠飾大棟の中央に置く寶珠形裝飾

6 鯱、大棟の兩端につけたる魚形の鴟尾を云ふ

7 正吻（蚩吻）　大棟の兩端につけたる鴟をいふ鯱

が大口を開きて大棟をかむ形のもの

8 旁吻　隅棟の端にある飾降り棟に取りつけたる鯱形。口を開かぬもの多し

9 鬼龍子　旁吻より先なる稚子棟に設けたる動物の飾りの列なり

右の通りであつて、大部分の建造物は今國寶に指定されて居る、これは珍らしいことの樣である。

堂宇の總數は大小取り交へて二十棟であつて。全部の堂宇の內外にかけてある扁額や聯やは百三十一である、皆隱元初め六七代までの住職の書いたものである、中には靈元天皇の御宸翰すら拜することが出來る。

數ある聯を一々記載することは煩に堪へないから今その一二を下に記すことにする。

總門には

宗綱濟道重恢廓
聖主賢臣悉仰尊

山門には

地闢千秋日月山川同慶喜
門開萬福人天龍象任登臨

大殿內正面の角柱には

宗門肇啓廓天心祇樹林中十聖三賢皆景仰
紺殿莊嚴光佛日寶華座上千秋萬葉永流芳

柱側には

莖草現紫金容赴感流慈道被三千世界
萬德功圓淨妙智隨機化物恩加百億人天

浴室には

身心淸淨未許便休
水垢頓除更須一洗

省行堂には

不關是非身增泰也心增坦
能省言行福愈廣兮壽愈長
道契周召天下千秋可聖化
德齊燕趙法門萬古仰恩光

右は面白いと思ふものを摘錄したのであるか、かくばかり多くの聯をかけて居る寺は日本では餘りに多く見ないことである。